

はしの なし

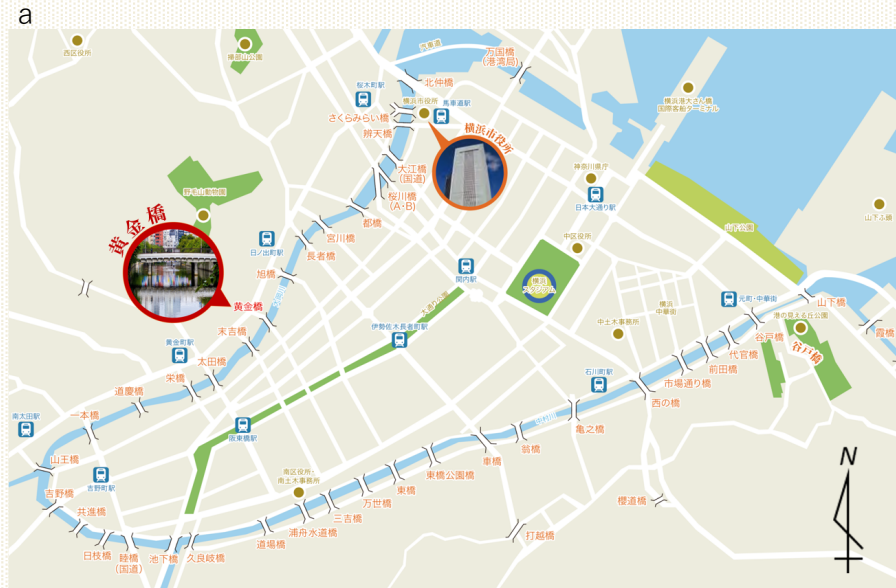
第九稿 黄金橋ものがたり

「はしのはなし」では、皆さんに横浜の橋の歴史や小話を、定期的に紹介していきます。第9回目は、黄金橋について。

黄金橋は、令和2年度に実施された「横浜の橋フォトコンテスト」にて横浜の橋・道路局長賞を受賞した作品の題材ともなりました美しい橋です。そんな黄金橋の誕生から架け替え、現在までの小話をしていきましょう。

1 黄金橋はどこにあるのか？

黄金橋は右図のとおり、横浜市庁舎の目の前を流れている横浜を象徴する川の一つである大岡川に架かる橋です。
また黄金橋の付近には同じく黄金の名を負う黄金町があります。横浜市内には大正12年(1923)の関東大震災の復興橋梁として178もの橋が架けられました。黄金橋は昭和3年に復興事業で架け替えられ、現在も残っている40橋のうちの1橋です。



【諸元】

- ・名称：黄金橋（こがねはし）
- ・所在地：中区末吉町2丁目
- ・橋長：27.2m
- ・幅員：11.9m
- ・竣工：昭和3年(1928)
- ・橋種：上路式3径間ゲルバー桁橋

令和2年度に開催された、横浜の橋フォトコンテストにて【横浜の橋・道路局長賞】を受賞した作品
作品名：「アートの架け橋」

2 黄金橋はいつから架かっていたのか。

時は江戸時代。木材・石材商人の吉田勘兵衛が中心となり、吉田新田が開墾されました。黄金橋の架かる大岡川も吉田新田の開墾によりできた川で、人口の増加や都市化によって物流が増大した明治頃には舟運路としての機能を果たしていました。

明治3年の関内周辺の地図を見ると、当時の大岡川沿いには橋が少なく、人々が川の対岸に行くためには、大きく廻って向かう必要があることがわかります。

初代の黄金橋は、明治5年(1872)頃、木材商駿河屋の主人である長谷川秀造が、そんな状況を見かねて独力で架けたと、長谷川秀造の甥であり、劇作家であった長谷川伸の自伝「ある市井の徒」に記載されています。

諸説ありますが、この話自体は、黄金橋建設事業において長谷川秀造が多額の建設費を寄付したことから、そのように表現されたのではないかと推測されます。

c

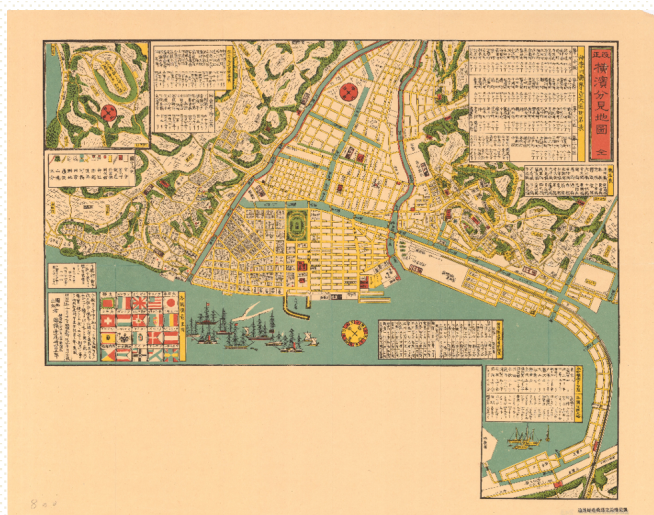


横濱全圖(明治3年(1870)頃)



左の地図の略図。黄金橋がなく、対岸に向かうためには、大きく廻らないといけないことが確認できる

d



横濱分見地圖(明治10年(1877)頃)



左の地図の略図。黄金橋が架けられたことによって周辺住民の便が向上したことが伺える。その後、明治15年までには黄金橋の前後にも、現在も架けられている旭橋や末吉橋が順次架けられ、より対岸へ渡りやすくなった

引用 c: 横浜市中央図書館所蔵,五葉舎万寿老人[著],「新鵜横濱全圖 隨時改刻 MAP OF YOKOHAMA」,明治3年10月出版

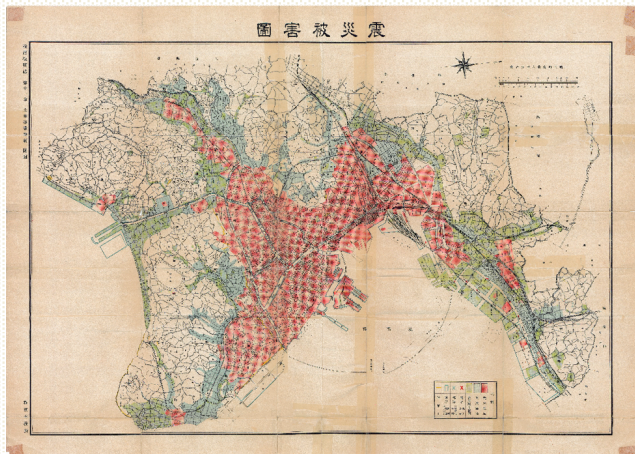
d: 橋梁課所蔵,錦誠堂尾崎富五郎[著],「改正横濱分見池圖」,明治11年1月出版

参考文献: 小野寺篤 [著],「よこはまの橋・人・風土」,昭和58年出版

3 関東大震災、そして復興へ

大正12年(1923)9月1日の関東大震災により、黄金橋も被災します。その結果、黄金橋も含め大岡川にかかる周辺の橋も軒並み落橋や焼失したようです。その後、震災復興事業として当時の内務省復興局と横浜市によって、これらの橋梁の復興が行われ、黄金橋は内務省復興局の施工によって昭和3年(1928)に架け替えられました。その後、戦災を経て現在まで、その当時の姿を残している貴重な橋となっています。

e



関東大震災による市域の被害をとりまとめた図

f



黄金橋だけでなく、その周りの橋も×印がされており、ほとんどの橋が落橋・消失したことがわかる。また周辺地図が一面真っ赤なのは、この区域が火災の被害を受けたことを示している

4 黄金橋を架け替えた人物とは？

架け替えられたこの橋の親柱も同様に当時から姿を変えていません。

この親柱を横から覗いてみると興味深いものが確認できます。

中々目につきにくい場所ですが、工事請負者の名前が刻まれたプレートが親柱に埋め込まれています。

現在は、このプレートが少し欠けてしまっていますが、プレートには「工事請負者 工学士 宮長平作」と刻まれていました。請負業者名が橋に刻まれていることはあっても、工事請負者の個人名が橋に刻まれているのは珍しいです。

宮長平作は、当時はまだ貴重であった鉄筋コンクリートに関する技術を用い、完成当時は世界最高の高さを誇った日立鉾山の大煙突の建設にも関わるなど、数々の実績から藍綬褒章を受章した人物です。

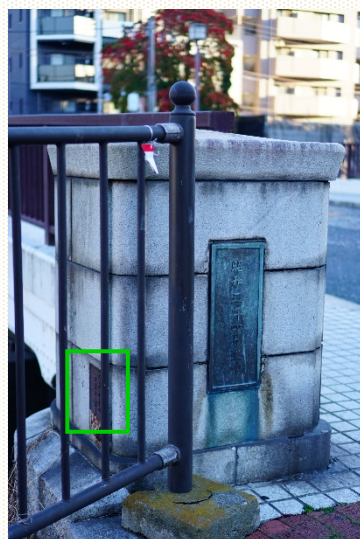
そのような技術者がこの橋の工事にかかわっていることから、国力をあげて震災を乗り越えていったのが伺えます。

g



右岸下流側より親柱を望む

h



左岸下流側より親柱を望む
緑枠の箇所にそのプレートが埋め込まれている

i



2021年3月現在は
「工事請負者 工学士 宮長…」
までは読み取ることができる

引用 e,f: 橋梁課所蔵,横浜市役所[作],「横浜復興誌第十一章 附圖 震災被害圖」,昭和7年3月発行

g,h,i: 橋梁課撮影

参考文献: 官報第8560号,昭和30年7月発行

5 黄金橋の「黄金」の由来は少し変わってる？

そもそも黄金橋の「黄金」の由来とは何なのでしょう。昔にこの橋の周りで黄金が出ていたとか、そういった逸話があるわけではないので、この黄金橋が架かっているまちが黄金町なためという、よくあるパターンの町名から橋の名前がつけられるケースだと普通に考えれば推測されます。

しかし、「黄金橋」と「黄金町」の歴史をたどってみると少し様子が違うかもしれません。

それぞれの歴史を調べると、「黄金町」は久良岐郡太田村に明治2年頃に新設されたとされ、関東大震災による被災を受ける前の初代の「黄金橋」は、明治3年頃に架けられ、明治5年頃に名が付されました。

ところが、「横浜沿革誌」という明治25年に刊行された初めての横浜についての歴史年表には、明治五年八月「黄金橋(太田初音町ヨリ吉田末吉町三丁目ニ架ス)ノ橋名ヲ付ス(明治十年黄金橋西沿岸黄金町ノ名称ヲ付ス)」との記録が残っています。この記録が正しければ、黄金町という町名が、この橋の名前を負っているという、通常とは逆の珍しいパターンと読み取ることができます。

この記録がどこまで正確な記録かはわかりませんが、本当だとすれば面白い逸話です。

6 最後に

震災復興橋梁の多くは、その後、河川の改修や橋の架け替えに伴い姿を変えていきましたが、今回紹介した黄金橋のように復興当時の姿を残している震災復興橋梁が、黄金橋の架かる大岡川には比較的多く存在します。

春には桜が舞い多くの人が行きかう大岡川は、橋の歴史を感じることができる場所です。これを機に調べてみて、現地へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

大岡川沿いの震災復興橋梁			
	橋名	施工(復興期)	完成年
1	辨天橋	横浜市	昭和51年
2	大江橋	横浜市	昭和48年
3	都橋	横浜市	昭和3年
4	宮川橋	復興局	昭和4年
5	長者橋	復興局	昭和3年
6	旭橋	復興局	昭和3年
7	黄金橋	復興局	昭和3年
8	末吉橋	復興局	平成19年
9	太田橋	復興局	昭和3年
10	栄橋	復興局	平成元年
11	道慶橋	復興局	昭和3年
12	一本橋	横浜市	昭和3年
13	山王橋	復興局	昭和2年
14	清水橋	横浜市	昭和62年
15	井土ヶ谷橋	横浜市	平成25年
16	蒔田橋	横浜市	昭和7年
17	鶴巻橋	横浜市	昭和3年
18	大井橋	横浜市	昭和3年
19	観音橋	横浜市	昭和41年
20	越戸橋	横浜市	昭和41年
21	千保橋	横浜市	昭和27年
22	港橋	横浜市	昭和57年



太田橋



長者橋



宮川橋

※ は震災復興当時のままの姿を残す橋